

あくまでも自分史として

# 「岳陽」と共に

第 20 号

発行日  
2024. 1. 30  
編集・発行  
井上講四／堂本彰夫  
※連絡先  
〒901-2225  
沖縄県宜野湾市  
大謝名 3-13-24  
教育協働研究所  
～岳陽舎～  
(井上講四宅)  
Tel:098-963-9282  
E-mail:  
gakuyou17@outlook.jp

〇二月、三月には、それぞれ県外へ！楽しみである！

今年も、いつものように、早一月が過ぎようとしている！こんな書き出しで、新たな年の経過を記すのは、甚だ恥ずかしい（情けない？）しかも、久しぶりの大きなギックリ腰も伴って！のであるが、これもまた、今の私の偽らざる日常でもあるので、何とも甘受するほかない!!

とは言え、来月、そして再来月は、少しは違った日常？を迎えることが出来そうである！そうなのである！二月は東京へ、そして三月は、鹿児島への旅が待っているのである！前者は、以前に、少しだけ触れていたが、ある賞の授賞式への参列という大義名分を伴う旅であるが（実は、我が奥さんに喜んでもらうためである？）、そこでは、東京在住の、大学時代からの友人であるF夫妻との再会を果たすためである（彼らとの、房総への温泉旅行もある！）！

後者は、最近何度もお世話になっている、岡山県倉敷市在のS君（某大学の教授／教子のつもり？）の研究（事例調査）のお手伝いということで、今回は、彼の実家でもある鹿児島県鹿屋市の学校を訪問することになっているのである！なお、そこでは、同じ学年の卒業生T君（鹿児島在）とI君（宮崎県在）に会えることにもなっている！再会を果たすことが出来れば、さらに嬉しいものとなる！

ということ、これから先、そのような旅や出会いが、いつまでも出来るわけではないので（つくづくそう思う！）、行ける時には、可能な限りそうすることになっている私であるが（ただし、その準備等は、ほとんど我が奥さんがしてくれている！）、それがまた、私の貴重な（自分勝手な？）歴史（自分史）づくりになることは言うまでもない!!

〇学会も、こんな形なら、今少し続けられるかも!!

先日（16日）、現在も、辛うじて唯一会員を続けている「生涯教育学会」の関わりで、Zoomによる研究会に参加した。もう会員としての参加はいい（卒業？）と、ここ数年来思っている私であるが、こんな形の学会参加なら、もう少し続けられる（否、続けてもいいかなあ）と思わせるものもあった（こんな時代になろうとは?!）！

ここでは、その日のテーマ・内容については、特に示さないが、毎回貴重な資料（情報）を得ることも出来る！もうほとんど研究者的な努力もしていない（意欲もない？）私にとつては、甚だ貴重な機会ともなっているわけである！しかも、今回は、発表者の配慮？で、参加者との質疑応答の時間が多く取られ、ただ聞くだけと思っていた私も、ついつい発言してしまつた次第である（やはり、根っからの「喋り好き」※我が奥さん評！実際は、そういうことではないのであるが?!）な私なのである!!）！

折角ではあるので、これについて少し敷衍して言えば、「学会」というものは、その分野・研究対象における「真理の探究」を目指す、当該集団の「結集の場」であるが、実際には、なかなかその実感が得られないものである（「年報」の発刊や、当日のシンポジウム、個々の研究発表における質疑応答の時間等は設けられてはいるが!）!!

要は、会員各自の興味・関心、そして「意欲」（いろんな意味がある!）によつて、その意義が担保されているわけであるが、特に、その「意欲」が減退している（それを必要とされない?）者にとつては、なかなかそこへ足を運ぶ気力（財力も?）が沸かないということである!!

〇大きな、そして強固な集団が、相次いで瓦解している!!

ところで、ここでは、こうした話題・テーマ（芸能界に関するもの）は、出来れば採り上げたくないのであるが（単なるスキャンダル話となる?）、昨年は（旧）ジャニーズ事務所、宝塚歌劇団で大きな問題が表面化し、そして今度は吉本興業が、世間の注目を浴びている！タレントや芸人が作り出す、言わば「虚構（虚飾?）の世界」とは言え、その存在の大きさと、それが与える社会的な影響は、たとえそれがマスコミ等によって喧伝させられているものであつても、今や計り知れないものとなつている！まさに、巨大産業化しているということである！

もちろん、ここでは、そういうことに関する具体的な事実を云々するわけではないが（出来ないし、したくないが!）、ここで書いておきたいことは、あんなに大きな、そして強固な集団（組織）が、見る間に瓦解していつていることに（特に、あの華やかなジャニーズ事務所）、驚きとともに、何か、時代の大きな転換点を予感（実感?）させるものになつているということである!!

しかも、こうした芸能界の話で終わるのではなく、これも、あまり書きたくないが、その後の、政治の世界の、いわゆる「ギックバック」事件に端を発する、某最強政党の激変（↓派閥解体?）も、ある意味、同じような現象として捉えることが出来るということである！端的に言えば、すべて、「奢れるもの久しからず」ということであるが、問題は、今現在の大きな力（組織／個人も?）が、その存在意義や、彼らが有している人間関係や力関係（主として財力による!）が徐々に変質し（ある意味必要とされていない?）、次なるパワーや社会勢力が求め始められているということではないか?そういうことである!!

それが、ある種の「時代の相転移（臨界現象）」なのかどうかは分からないが、少なくともスター（否、ヒーローかな?）やタレントのあり方が問い直されていることだけは確かであろう!!そして、ここでは、奢り・強権／虚飾・虚勢は、全く不必要だということである!!

（井上）

○「盛者必衰の理」！誰が、何故、書いたのか？

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕る人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつひにはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

周知のように、右は、かの有名な『平家物語』の冒頭部分であるが（初めてそれを見た！あまりにも有名過ぎて、直接全部見るとはなかった！つまり、そのエッセンスだけを、勝手に理解していたということである）、表の井上氏の記事内容に関わって、少しここでも、何か感じ入ったことを書いておきたいということで、取り出してきたということである！ちなみに、『平家物語』は、鎌倉時代に成立したとされ、平家の栄華と没落、武士階級の台頭などが描かれているものである（ネット情報より）。

ところで、この物語は、作者不詳（藤原支族の末裔とも）の軍記物語（冒頭の「琵琶法師」による語り）とされているが、私には、この作者の胸中（目）が、何故か、一番気になる！というか、何故このような物語（テーマ）を書いたのか？そこが知りたいということである！余談だが、かの「鴨長明」（鴨氏／賀茂原主氏の末裔）も、このような「諸行無常？」を説いていた『方丈記』！

要は、そういうことを、思うことはあっても、敢えて言葉・物語にして書くということに、どのような意味があるのかということであるが、ある意味では、敗者あるいは諦観者／遁世者としての捨て台詞（一面では、ある種の「矜持」あるいは「ざまー見ろー」感？）なのではないかということである（それが、文学ともなる）!!

もちろん、そこに、「世の警鐘」という意味もないわけではないが、私には、どうも、そちらの方の解釈がピンとくるし（自己投影）、そうであるからこそ、そこにある、生身の人間の「切なさ」（どうしようもないではないか！）感が、とても共感できるということである!!

○画期（革命？）的な論証結果であるにも拘らず…!!

昨日（20日）、例によつて、古代史関係の動画を漁っていると、画期（革命？）的な論証結果であると言える（否、断言できる！）動画を発見してしまった！改めて、それに關する情報をネットで調べてみると、その論証結果は、既に2020年9月には世に出されていたようである！にも拘らず、現在においても、かの「邪馬台国所在地論争（事實上は、「北部九州か近畿大和か」の二者択一論争）」は続いている！一体、どうしてなのか（何か作為でもあるのか）??

詳しいことは書けないが、その論証者「関川尚功氏」によれば、書名からも分かるように『考古学から見た邪馬台国大和説 畿内ではありえぬ邪馬台国 梓書院、考古学的見地からは、3世紀（邪馬台国／卑弥呼時代）の大和（纏向遺跡）には、『魏志』に示されているような痕跡はないということである！それを受けた、新たな展開・論争が望まれるわけであるが、その動きがない？改めて、それは何故なのか？

・短歌に託してやはり世界は変わっている!!  
・たとえ国内でも、行かれるうちは  
すべて行く！それが我が歴史となる！

・学会もズーム使えば まだまだよし!  
いずれにしても こんな時代が来ようとは!

・あんな組織が 壊れるなんて!  
やはりそれは 時代の大転換なのか!!

・“盛者必衰”？ そんなことは分かっている!  
問題は 何故それを語るかである!!

・本質は あつちかこつちかではない!  
いかなる史実が そこにあったかである!

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕⑩

○「大幡主命」と「開化天皇」は、「新旧倭国勢力」（二極体制）の生みの親でも、何故か双方は隠されてもいる!!  
ということでは、後漢から「倭（倭 倭国）」とされていた「邪（邪 倭）が、何らかの事情で（最後は覇権の危機）、2世紀後半から各地に移動し（それに伴う騒動が、いわゆる「倭国大乱」と呼ばれるもの）、

その彼らの東への移動（吉備→出雲→近江→大和）が、「神武東征」という物語に投影（拡大脚色）されているのではないかとということであるが、冷静に見れば、そこには、北部九州で、「奴（邪 倭）国（倭）を追いやった「新（倭）倭国勢力」と、東へ移動（大和に集結した「旧（倭）倭国勢力」の「二極体制」が出来上がったのではないかとということもある!!ただし、もちろん、「記紀」は大和に集結した「旧（倭）倭国勢力」の方から見た建国史を描いている!!そうしなければ、自らが創出した「万系一世」の物語が崩れる（史実がバレる）!!そういうことである!!

であれば、ここでの「大幡主命」や「開化天皇」の話は、そうした、いわば「新旧倭国勢力」による「二極体制」に絡んだものとなるので、そのような視点での史実説明が求められるわけであるが、実は、そのこと自体が、「記紀」では隠されている、否、話が歪曲ないし捏造されている!!すなわち、「大幡主命」は「旧（倭）倭国勢力」、「開化天皇」は「新（倭）倭国勢力」の代表（リーダー）ということであるが、両者は、共にその素性等が隠され（別な新たな勢力の出現と神または継体天皇を擁した勢力）、その出身地（俗體の場所）である北部九州での痕跡が、ほとんど消されてしまっているというところである（しかも「大幡主命」のことは、むしろ近畿で多量!!）!!

だが、その名残（分る人には分かる）は、前者であれば「櫛田神社」、後者であれば「老松神社」というような形で（もちろん名称や祭神等の改変がなされている）、今なお存続させられている!!したがって、問題は、何故そのようなことになっているのかであるが、裏を返せば、そこに真実を見つかる材料が横たわっているということにもなる!!（つづく）

（堂本）  
〈編集後記〉年始早々の大災害や事故のことも、人の世の常で、徐々に遠ざかっているように見えるが（だが、能登半島地震だけはそうではない）、私（達）は、そのことを傍目に、いつものような日々を送っている！そして、無理矢理ではあるが、数少ない楽しみを心待ちにもしている！多分？これで良いのだ!! 井上／堂本